

付

TLA講演会の記録より

会報に目を通していて下記の2つの講演記事が心に残った。お二人ともこの世を去られた方であり、講演が行われてから30年近い歳月が経過しているが、全く古さを感じさせない。会報は図書館学関係の索引誌に収録されていないので、このまま誰にも読まれず埋もれたままになっているのはいかにも惜しいので採録した。

山本 七平（山本書店店主）

「図書館と日本人」『東京都図書館協会報』No.56、1977年3月

黒田 アンドルー（アメリカ議会図書館東京事務所長）

「LC - 米国議会図書館 の過去・現在・未来」『東京都図書館協会報』No.58、1978年4月

『日本人とユダヤ人』の著者イザヤ・ベンダサンこと山本七平氏の講演は、図書館を通しての日本人論であり、裏を返せば日本の図書館論である。日本では伝統的に索引が発達して来なかったのは、システムティックな思考の欠如があったのではないか。知識の細分化に伴いシステム思考が必要になってくる。今の情報検索の基本的な考え方を示唆している。

黒田氏の講演は、LCが図書館協力の一環として1901年から印刷カード・サービスを始めたが、国内の何百という図書館と目録規則や分類規定の摺り合わせを行い、何十年もかけてルールを作ってきた。スプートニック・ショックで米国は大学や研究機関に莫大な研究開発費を注いだ。その恩恵を受けたLCは東京を含む世界12カ所に出張所を設けて、研究用の図書とその国で作成しているカードを購入した。カード数は増加する一方で年間250万枚にも達し、遂にMARCの開発につながって行くというLCの壮大な情報サービスの歴史とエネルギーに圧倒される。黒田氏が自身で加筆されたというのが、LCのフィロソフィーが把握できる貴重な論文となっている。

図書館と日本人

山本 七平

昭和51年5月15日 TLA講演会の記録

図書館は知られていない

山本でございます。実は大分遅刻いたしました...遅刻いたしましたことは私の方の手違いなのですが、日本の図書館というものがいかに知られていないかということを実証したようなものでして.....。

タクシーに乗りまして、都立中央図書館まで行ってくれと言ったら、運転手は「はい」と言って都庁の図書館まで行ってしまい、途中で気付き、それは違うんだ有栖川公園だと言ったら、なんでそれを始めから言ってくれないんだと大変怒るんですね。

有栖川公園と言えば、皆わかるんですが、都立中央図書館と言うと誰も知らないという。これは実に象徴的なことで、東京のような大都市に於いても、都立中央図書館をタクシーの運転手でさえも知らない。いかに図書館が知られていないものであるかということです。

索引を利用しない日本人

そこで、何故日本人は図書館を使いたがらないのか。私なども割合使いたがらないから、他人のことは言えないが、ともかく使いたがらない。これは、本に対する基本的な考え方が違うのではないか、そう思わざるを得ない。

エンサイクロペディア・ブリタニカの前社長さんに聞いたことですが、販売に際してブリタニカのセールスマンが受けとる客の最初の答えは、百科事典が必要な時は、

図書館に行ってひく、ということだった。

しかしアメリカ人はそうは言わないそうです。百科事典となると大体全部揃えてあり、それでも不満足の場合は図書館に出かける。これが基本的な発想なんだそうです。

次に驚いたのは、そんな大部のものは、辞書を使っても読みきれないからいやだ、という。いやそれは全部読むものでなく、索引があるのだから索引をひいて、調べたい所だけ読むものだ.....そう言うと初めて索引というものを見たような顔をして...それが立派なインテリだから驚きました...そういう話を聞いたわけです。

確かにブリタニカは索引が自慢でして、よく出来ている。日本の本は、非常に索引がよろしくない。概してうちの本はよろしくないことはないですが(笑).....

索引というものは非常に有益である。私はどんな本を買ったらよいか考える前に、どんな本は絶対買わなければならぬかを考える。本屋でパラパラめくって見ることのいい点は、索引を調べてみれることです。日本の本で一番大きな特徴をあげれば、私がよくいう員数索引だ。索引だといばっているだけで、実際に利用できない。その次に、おどし注 - これは出版屋の用語ですが - これは立派な本だと思わせるように注が付いているけれども、注を読んでもわからない.....注が注の役をしていない。あってもなくても変わらない。こういった傾向がある。

本を見てこの本が信頼できるか否かを鑑定する一番よい方法は、索引をひいてみればよい。これがいい加減だと止めた方がいい。最近出た百科事典を見ても、非常によくはないのがあります。どういう基準で索引を作っているのかわからないのがある。まず索引を調べてみてどれが一番よいか選ぶ。これが本の買い方の基本です。

本の買い方を聞かれた場合、出版者として忠告するとすれば、どの方面でも基本的に言えることは、注が注として成り立っているかどうかという点です。限られたスペースにその頁内の語句を的確に説明するということは、大変難しい。これが本当に出来る著者というのは立派な著者です。ところがこれがなかなかうまく出来ていない。注を読んでも実際なかなかわからない。で、もう一つは今言った索引です。

ところが、こういう視点で本を見ていけ、というとは皆意外な顔をする。というのは、日本の本には索引のないのが随分多いんですね。それに索引体系に工夫というものが全然ない。私のところは、曲がりなりにもありますが。

索引を作るのが割合好きなので、いろいろな新しい索引の形態というものを考えているわけなんです。出版というものは一定の読者を前提としているものですから、その前提が違ってくると理解できない。翻訳書の場合、向こうで通俗書と言われるものがこちらで理解できないことがある。これはよく出てくる現象で、こういう場合は訳注というものがが必要です。私のところでは、索引の下に、各項目に、字引のように説明を設ける。こういう方法をとって見たことがあります。これは割合好評でして、こう

いう索引は、翻訳書の場合非常に便利なんです。

索引一つ作るのでもいろいろ工夫できるのですが、出版社というのは割合作りたがらない。1年がかりでやった索引……何人が携って作っても頁数にすれば要するに最後の30頁くらい。30頁増えても本の定価はそう上げられない。だから作りたがらないのも無理はない。

しかし評価は違って来る筈なんですが、読者はその違いをなかなか評価してくれない。そうすると、読者の方には悪いですが、出版社はなるべくそういうことはしたくないというので、当然索引があっていいと思われる本でも索引がないのが出てくる。つまり、第一には、索引にそれだけの価値があるということを読者の方が評価してくれないということに問題があるんですね。これは立派な索引がついているのだからこれだけ高くても不思議ではない、と思ってくれば、我々としても必要を感じるのですが、なかなか思ってくれない。

思想史とか、歴史の叢書とかの最後に索引を1冊つけるとすると、その売れゆきが非常に悪い。ひどいのに なりますと、例えば6冊くらいの叢書で最後の1冊が索引になっているという場合、最初の方の5冊が5,000部売れるとすると、索引の1冊は悪くすると半分以上になる。手間をかけても売れない。これが、日本の索引が不備な理由です。

どうしてそうなるか、ということをお我々絶えず、営業的にも、編集的にも考える。さらにそれがそのまま進んでいくのか。もっとその傾向がひどくなるのか。それとも段々この傾向は改まるのか。これは皆さん方が、ちゃんと学生教育、図書館教育と

いうものをして下さるか、下さらないかで決まると思うのですが、私自身は、大体非常に悪い方向に進んでいる...索引的なものをますます読者が評価しないという方向に進んでいる、と見ています。

私の世代ですと、電話番号がわからない時は、電話帳をひく。索引で電話番号を調べる。これは当たり前のことですね。私の子供になりますと、絶対電話帳をひかない。104番に聞くという。こっちが当たり前なのです。我々の場合ですとまず電話帳でひくのが当たり前で、それにどうしてもない場合は仕方がないから聞く。この二段階になっている。今の子供はこの逆になっていて、何でもよいから聞いてしまおう...ひくのは面倒くさい。こういうことになっていて.....退化じゃないかと思えます。

もう一つ、この前韓国に行った時調べてきたことですが、不思議なくらい電話帳というものをひかない。電話帳を使えばわかるのに、使えない何か特別の事情があるのかと、こちらが変に気をまわすことがあるのですが、そうではない。電話帳をひいてみようという発想が出てこないわけです。これが非常におもしろい。韓国も日本も、儒教圏、仏教圏に入るわけですが、伝統的に文化というものが違う面があるのではないか。明治以来ある時代には索引が相当立派なんです、それが戦後だらしくなって、やっぱり退化現象ではないかと考えるわけです。

システムの概念が欠落

何故かという問題になってきますと非常に複雑なんです、基本的に考えますと、我々の発想には、システムという概念がな

いのではないか。このことが一番よくあらわれるのが宗教です。西洋には、システムティック・セオロジー(組織神学)というのがありますが、我々にはシステムティックな宗教というものは考えられない。例えば、仏典なら仏典というものをシステムティックに把えてそれを研究するという方向がとりにくい。

とりにくいというのには理由があります。基礎がない、伝統がない、ということもありますが、一つには、そういう物の考え方をしない...しないでやってしまう。本が1冊あった場合、それを全部始めから終わりまで読む。だから、エンサイクロペディア・ブリタニカをもちこまれると、それは始めから終わりまで読みきれない、だからいらない.....そういう形になっている。つまり知識というものをどうやって獲得するかという一番基本の考え方が彼らと我々と違う。図書館が利用されにくいというのも、このことが一番根底にあるのではないか。

もう一つは、民族.....いつもこうになってしまうのですが、一民族一言語一文化という単一社会では、そういうシステム化をする必要が全然なかったのではないか。そういうことが歴史的に考えられる。

非常に古い時代、1,400年頃のポリグロットという聖書がある。ポリグロット、つまり多言語ですが、見開きにしますと6つくらいの言語で同じことが並列して書いてある。この主語は、何語で何というか.....ギリシャ語、ラテン語等々。それを全部各欄に並べて書いてあるので大部の本になっています。あちらでは、こういうものを編集しているわけです。つまり一つの対象を様々な言語で眺める。こういう発想が古くから

あるわけです。

ところが我々は、一つの対象を他言語で眺めるとか、別の方法で眺めるとか、こういうことを非常にやりたがらない。この百年間いろいろなことをやってきましたが、本当の聖書総索引というものが日本で出たのは8年くらい前ですか。ヨーロッパで出ているような、ものすごい画期的索引というのはまだ出ていないですね、百年たっても。

それからもう一つには、辞典というものを作ろうという動きがなかった...原語と日本語とを対比させようという。対訳版やポリグロットで、いくつかの言語から一つのをみていく、こういう発想が全然なかった。

百年間いろいろやってきたのですが、誰もそういう発想をしなかった。それが我々のもってる一つの特徴と思われる。その間、聖書関係図書、宗教書は、洪水のように出てましても、こういう発想で何かをすることは誰も考えなかった。それは、いわゆるシステムティックに物を把えることを好まないからですね。しかし、それが対象をどう把握するかという場合に一番大きな問題になってくるのではないか。一言語で対象を一方向から見るということは、一つの読み方にすぎない。別の読み方も出来る筈で、その中にある言語を全部索引化すれば別の雰囲気が出てくる。要するに、分析的かつ総合的に、いわゆるシステムティックに思考する、ということをしていない。

全然していないというのは、考えてみればおかしな話です.....ヨーロッパ人は、それを年中繰り返しやっている。ところがこ

の百年、日本では全然やっていない。それは、対象の把握の仕方が基本的に違う、そう考える以外にない。

知識の細分化 - 専門化への要請 -

図書館史というのは、皆さんのご専攻でしようが、例えば、アレクサンドリアの図書館とか、バチカンの図書館とか.....色々な意味で古い、いい資料が図書館にはある。面白いことには、昔は、図書館は出版社を兼ねていた。ですからライブラリアンは、同時にエディターであった。現存する聖書で最も古いものにバチカンの写本というのがありますが、こうしたものの出版活動を昔は図書館でもやっていたわけで、図書館員というのは、編集者的感覚をもつという伝統があった、と私は考えています。

そういう風に考えますと、図書館で復刻・出版をしてもいいわけで、日本の東洋文庫など、財政的に困っているそうですが、どうして大いに復刻をして売らないのだろうか、と思っているわけです。

図書館というものが、本が作られる所であると同時にそれを収蔵している所である、こういう未分化の状態が長く続いた.....いわば、総合的な出版社のような形で。一方、出版社の方は自ら一つの性格をもたざるを得なくなっている。このことは、現在、図書館についても言えることで、図書館もまたある種の性格をもたなければいけないのではないか。これが恐らく日本の図書館に一番欠けているのではないかと我々は思います。

例えば、あの図書館に行けば、この方面のものは全部ある、という風に、一つの性格をもつこと。このことは図書の小売の場

合についても出てきている傾向です。人間の知識というものが、細分化されてきているのです。今我々が一番困っている問題ですが、主題が細分化されるに従って、本も個別に細分化した主題で出版することになる。そうすると個々の出版部数が減ってくるので採算がとれなくなってくる。この傾向はこれからどんどん進むと思われる。

これが一番顕著なのは、医書の出版です。かつては、内科学と外科学と2冊出していれば半永久的に売れたと言われたものですが、今は外科といっても 外科××外科とひどく細分化されている。内科にしても、内科ということ一つにくっってしまうわけにいかなくなっている。売る方も、買う方も皆困ってしまうわけです。

そこで、全体を一つの総合的なシステムとして活用するにはどうしたらいいか、ということになってきますが、そのためには、本当に索引が必要となってきます。

本の販売面 - 販売面というのは動きが速いのです - ここには、専門化しようという傾向が強く出ている。それは、こうしないともう営業が成り立たない。それは、勿論我々にしてもそうなのですが。例えば、中国関係の本を探そうと思ったら、九段下の山本書店に行く...時々うちと間違えられるのですが(笑)...そこは、中国関係の書物に関しては実に徹底して集めている。一つの観点から、いっぱい本を揃える。これは我々にとりまして非常に便利です。そこへ行けば必ずある。そうすると自分の住んでいる近所の小売店を探して、無ければそこへ行く、という方法をとらないで、いきなりそこへ行ってしまう。こういうことが小売店では起こっている。

同時に、図書館にもこうした方向が要請されるのではないか。図書館へ行ってカードを操る。カードを操ってあるかないかを自分で確かめるのですが、見たい本があるかないか不安です。これが実は図書館を利用したくなる理由の一つだと思う。あそここの図書館には、あるに決まっている...そこに無ければ、日本中どこにも無いと諦める...図書館はそういう所であってほしい。本について、こうした要求はますます強くなっていくと思いますし、もし図書館がこういう風になれば、図書館に対する信頼感が出てくると思う。もっともそれには、図書館全部を包むシステムが必要になる、つまり、全国の図書を総索引化しなければならぬのですが、私などこういうものが出来たら実に便利だろうと思うわけです。

なぜ索引的思考が育たなかったか

我々日本の行き方というのは索引的でなかった。これは言えます。但し、明治に於いてそれは組み換えなければいけなかったのですが、そこまで、いわゆる索引的に消化するという風に進まなかった。何故進まなかったかと言いますと、むこうのことをそのまま真似をする時、これには検索は必要ないのですね。例えば本の読み方がそうです。ある1冊の本を全部まとめて頭に入れようという場合、検索ということは一切必要ない。始めから終わりまで読めばよい。自分の方に何か一つの主題があって、こちらから何か選定しようとする時初めて検索手続が必要となってくる。

明治は、あらゆる部門で専ら日本は真似をした。その場合、モデルの通りにすればよいという時は何事も検索する必要はない。

むしろ検索しないでそれをそっくり手に入れた方が早い。そこで長い間検索ということをしなかった。その前にある日本の徳川時代でも検索という方法はないわけですね。

仏典というのは元来絶対的に索引がつかれないそうです。第一範囲が決まりませんし、言葉の概念も決まっていない。しかし、比較宗教学など、索引もなくてどうやってやっているのでしょうか。まず両方の索引を調べて、同じ語彙の意味内容の違いから探求していかねばならない。仏典というのは範囲が決まらない。全部含めたい。非常に意味内容が違う。だからもう索引をつけれない。それははじめからシステムという考え方を無視しているようなところがあるからこうなるわけです。

この現象を明治にあてはめてみた場合、一つの対象をそのままもってくればよい... こういう発想がある。選択に基づいて何かを取り入れようとする、どうしても索引というのが必要なんです、それをしなかった。しなくてもうまくいっていた。戦後もその繰り返しで、一つのことを索引的・組織的に自分のシステムの中に取り込むという方法をとらなかった。今までとは違ったものをただそのままこっちに入れる、そういう形になっている。戦後30年、別に組織的思考とか索引的心づかいは一切不要だった。逆にマイナスになるという面もあったのではないかと。ところが今になっていろいろな面でゆがみが出てきた。ここで何とか始めなければならない。そこでやっと索引的発想が出はじめて来た。

今まで図書館といったものがよく使われなかった一番大きな理由は、今言ったような伝統の問題がある。彼らヨーロッパ人と

いうのは、必ず過去というものを一つのシステムとして把握する。簡単に言いますと、索引化してその索引の項目を別の形に再構成するという形で未来を予測する。これが伝統的な彼らの行き方です。聖書をとってみても、無制限に同じことを何回も繰り返しているようですが、絶えず索引的に分解して、その項目をまた別な形で組み立てていく、そういう発想があるわけです。これが彼らの進歩という概念だと思う。それ以外に彼らの言う進歩というものは考えられないのではないか。

我々はそうではなくて、新しいと言われたものを全部摂取すればそれでいい。今までそうやってきた。これが進歩だと見てきた。それは追いつくまでは非常にいいんですが、追いついてしまうと方向を失ってしまう。恐らくこれから図書館も普及するでしょうし、色々な形に於いてアメリカやヨーロッパの水準になると思います。が、そうなった時、これからどうなるんだということが、恐らく我々、何もわからなくなるのではないかと。これは我々にとって困った問題になると考えられます。これは図書館だけの問題ではないですね。図書館というところには、あらわれてくるだけで、あらゆるものの行き方がこういう形になってくるわけです。

ここで我々はどうすべきか、ということになるのですが、今言いましたように、否応なしに現代社会というのは進んでいくわけで、ストップさせることは出来ない。日本だけストップして鎖国してしまえば、それはまたそれで一方法かも知れませんが... ですが、そういう風に鎖国的思想というものが必ず日本には出てくる。今も相当出

てきていると思います。ある一定限度で情報を遮断して、それによって社会を安定させようという方法が絶えず出てくる。

あれは大体日本が追いついた、追いついたと誤認した瞬間に出てくる。それでストップしてしまう。同時にそれを固定するために情報を入れないようにする。これは鎖国とは何かという時に一番大きな問題になるわけですが、1630年の洋書禁止令でしたか、あれが本当の始まりで、とにかく情報を遮断する。それが一番大きな眼目であったわけです。一つの安定を求める場合に、情報を遮断しようという思想が必ず出てくる。その中で一つの安定状態を保とう。これが絶えず出てくる思想なのです。今もそれがあのように思いますし、これからますます難しい状況になると思われま

す。こういう場合、片方において新しい情報がどんどん必要である。要するに細分化し過ぎている。一方において情報を遮断したいという欲求は絶えず出てくる。こういう場合、これを解決する問題点がどこにあるかと言えば、結局、非常に分化してきた情報というものを自分の位置から索引で再統合してみる。そうする以外に方法がないんですね、何かを把握しようとする場合。恐らく、これからヨーロッパとかアメリカとかあらゆる方面との関係というのは、そういう形での把握でしか対応できなくなるだろうと思う。自分が一つの意識に基づいて向こうの概念を索引でつかんで、それを再構成して、それに基づいて新しい日本を作る、そういう形で未来を作る以外にはない。

ところで、それが我々非常に下手なのです。その下手なところが端的にあらわれているのが、図書館が使えない、はっきり言っ

てどう使ってよいかわからない、ということなのです。どう使ったらよいかわからない大きな理由は、自分がある位置に立って、どのようなシステムでどのように情報を獲得するものかということが本人にわからないということです。ですからそれは本当に何かを知ることにかかわることですが、これは評判だから読んだという具合で、自分の発想に基づいて読むということをしていない。そうすると、どうしてもこうなるわけです。

これには伝統ということがありますが、もう一つ、教育という問題がある。人間がものを知ることとは一体何なのか。その基本を小学生の時から教えないと、これはもうどうにもならない。では知るとは何なのか。それは自分に関心のある方向のものを自分なりに組織立てて、それに必要な資料を手に入れていくことで、これをやるには検索という以外に方法はない。

システム思考の必要性

欧米の大学と日本の大学がよく比較されます。むこうでは、様々な参考資料を示され、一つの主題を与えられてそれを自分だけでまとめてみる、そういう訓練をしていくという。これが大学教育の一番大きな要素になっている。こういうやり方、教育のシステムというものが日本にはない。ですから、図書館というものをどう利用してよいかわからないというのも当然だと言えます。その発想がいかに無いかということは、あらゆる面が出てきている。

新聞の索引が出来るということですが、索引で項目を追ってみると非常に面白い。一つのをそのまま受けとって、同時に

けろっと忘れてることがある。一つの主題を、例えば3年なら3年に渡って追っていく、そういう把握の仕方というのはあまりしない。編集している人間がやっていない。してないから、例えば今度のロッキード事件なんか面白いですよ。あの事件が起こった頃からの関連記事、47年当時のロッキードに関する記事は随分あるんですね。それをもしも新聞社自身が自分の新聞を索引化しまして、ある時点に於いてどう報じたであろうかというのを索引化して、それで一つの発想をしたとすると、全然違った風になると思う。3年前に自分達が提供したニュースと現在提供しているニュースと、その二つの間に関連を求めることが彼らには出来ないうですね。出来たとしたら、あんな変な記事にならないと私は思うのです。これが日本に於ける現状です。

今言ったようなことが出来ない、あらゆる面で出来ない。ですから、一つのものがこういう経過を経て現在の結果になったということを実は誰もつかんでない。全部突発事故のような印象を受ける。突発事故といっても、こういうことに関する報道はあるのです。けれどもそれをずっと索引化して行って、調べて、こういう形になって現在に至っている、こういう話の仕方というのが出来ない。これはやはり索引的発想が報道する方にならないうことで、ないからやっている本人が非常に矛盾した変なことを書いているし全然それを意識していない。

今まではこれで逆によかったのではないかと私は思う。何かの真似をしている時というのはそれが一番いい、前だけ向いていけばいいのですから。3年位前のことは一切忘れてしまった方がやりいい。ところが

それが出来なくなりまして.....過去の色々な変化の延長線上に未来というものを予測しなければならないう場合、それが報道に於いても何に於いても実際は出来ないう。これもやはり索引化が出来ていないうからです。一つの紙面をつくっている方も、それだけしか見ていないう。この中の一つの項目がどういいう傾向をつくっているか、自分で意識がない。これは端的に言いますと正確な知識がないということだす。正確な知識を手に入れるにはどうするか。これは基本的なことです。これが学校教育で全然やられていないう。いわゆる組織的にものを知るとはどういいうことなのか。これは理屈で言ってもわかりませぬので、伝統的な訓練、教育でやってゆけばよい。それしか方法がない。

今のままですと、図書館といいうのは本があるだけでして、利用する方が利用できないうのです。何をどう見つければよいかといいう技術といいうものは、明確に問題意識がなければ実際役に立たないうのですね。ですから図書館だけ利用できないうのではなくて、あらゆる情報を、どういいう風に利用するか、これが出来ないう。逆に情報を提供している方にもそういいう意識がない。これは日本の大きな特徴であると思ひます。

これからどうなるか...どうなるかといいうことは、単に図書館がどうなるかといいうことではないわけだす。そのマイナス面といいうのに気づき始めた。気づき始めたから、色々な気配が出てきていいうわけだすね。出てきていいうことは何となく感じ始めた。何となく感じ始めても、何となく矛盾を感じたことは何なのかといいうことを追求するシステムがない。ですから、これは、図書館学をやられていいう方が大いに啓蒙すべきこ

とでもあります。そういう発想でものを見ていけない限りシステムは出来ない。これを明治以来、我々はやらなかった。やらなかった一つの矛盾がはっきり出てきているのだから、慌ててもどうにもなるものではない。そこで本腰を入れて、組織的な知識を把握するとはどういうことなのか、どう方法があるのか、それをまず確立する。それがはっきり一つの常識にならない以上、本当に図書館というのは誰も使えなくなるだろう...私はそう考えています。

これは図書館が、ある意味で教育しなければならない。こういう風に使いなさいという教育は、やはり一番根本にその発想がないと言えない.....システムとはこういうものだと、だからそうしなさいと。これが恐らく一番基本の問題だと思う。しかし、今まで我々はそれをしなかった。これは全般的にこうした問題意識がなかったということです。

図書館というものは、自然発生的に出てきたものですし、ポリグロットとか索引も非常に古くから出てきている。何故出てきたかという一番大きな理由はローマ社会からあるのです。一国家多文化社会という言い方が当たっているこのローマという一つの国家の中には、様々な文化様式が併存していた。こういう場合、人間はどうしたらいいかという、自分達はこういう考え方をしているのだ、ということを他文化の人達に説明しないと生きてゆけないのですね。言葉が通じませんから誤解が生じ、偏見も生じる。こういう場合、最終的には自分達はこういう考え方をし、こういう生き方をしているこういう者だ、ということを相手にわかるように話してやらなくてはなら

ない。

人にわからず場合、自分の論理で物を言ったら絶対相手はわからないのです。ですから相手の必要なシステムの中にこちらの概念をあてはめてやるくらいしなくては理解できないのですね。これを彼らは命懸けでやらなければならなかったので、あらゆる方法で探求して、結局相手の頭の中の組織に自分達のもっている概念を分解してあてはめてやることによって、相手にものを依頼した.....こういう方法をとらざるを得なかった。

お互い、相手の論理にならって自分の意見を言う。これによって相手の考え方を変える。これがいわゆるレトリックというものです。自分の方で一方的にどなっても理解は成り立たない。自分の思想形態を一応くずして、相手の思想形態の中に入れてやり、相手の考え方を変えていく。これをやるためにはどうしても一つの組織化というものを頭に入れることが必要なわけです。こういう方法を彼等は長い間に身につけている。

これが実は我々日本人には出来ない。出来ないというのは、簡単に言えばしないで済んだということです。そういう面倒くさいことは一切やらなくて済んだ。そこで、日本人にはレトリックというものがない...日本人同士は夫婦のようなもので、あれをああしてくれ、と言えはすぐわかる、とよく言われます。相手の頭の組織は自分達とは違うんだ、相手にこちらの方を合せて解決しなければならない、という風なことがなかった。こういう必要を我々は感じなかった。感じないで済んでしまう。

ところが現在の日本では知識というもの

が非常に細分化してきている。今度は、あれはあれでこうしてくれ、ということでは日本人同士でも済まなくなる。済まなくなるとお互い通じない。お互い通じあえた社会というのは一変してお互い通じあえなくなる。それは、それだけ社会が細分化されたということで、それにどう対処するかという対処の仕方を実は知らない。知らないで済むということは実は非常に有難いことです。それが今後どうなるだろうという不安は皆持っているわけです。持っているながら、初めての事態なのでそれをどうしたらいいのか分からない。

図書館の専門化とシステム化を

そういう状態になった時、どうしたらいいかということ、まず、知識の索引化が必要になる。それには頭の中を図書館のように利用するということが、それがまず出来ないと図書館は利用できない。自分のもっている知識を組織的に把握して、それを一応解体して他人の組織に入れ込むこと。こういう操作というものを知らないで図書館というものは利用できなくなる。ですから、まずそれを人々が意識し始めれば、本当に図書館というのは必要になってくるのです。あらゆる面で必要になってくる。そうやってきた場合、日本の図書館はどうかということ、使いにくい。確かに使いにくい。

使いにくい理由は、日本的というべきかもしれませんが、何でもワンセットずつある。あらゆる部門についてワンセットずつある、ということです。それは日本の軍隊に非常によく似ている。飛行機も戦車も何でもワンセットずつある。全部ワンセットずつあるのですが、実際には使えない。私

は図書館の全部を知っているわけではないですから、全部にあてはまるかどうかは知りませんが、本当に困るんです。何かを調べようという場合……全部ワンセットずつある。少ないものがワンセットずつある。それは全然使えないのです。自衛隊は戦力なりや、という話がありますが、ああいう形態では絶対実戦に使えないようになっている。図書館も下手をすると実戦に使えないんです。

これは一図書館だけで解決できる問題ではないのでして、全図書館が総合的に機能し、それぞれの図書館が専門化してくれば大変いいと思う。例えば、ここの図書館に行けば世界中の聖書関係の本が全部ある、という風に。そういうものが各部門別により、どのような本もある。こういう風に出ていて、それを全国的に組織化していく。私は将来こういう風にならないと図書館は使いにくいのではないかと思います。これは知識が細分化すればするほど必要になってきます。このことは、出版傾向からも販売傾向からも言えることだと思います。

(山本書店主)

- 文責 事務局波多野 -

LC - 米国議会図書館 - の過去・現在・未来

アンドルー・黒田

(LC東京事務所長)

昭和52年11月 TLA講演会より

「LCの黒田先生よ」といわれたこと

米国議会図書館(Library of Congress)の協力活動について、二・三のことをお話したいと思います。

Library of Congressというと長たらしいので、ふつうはLCという略称を使っています。LC内でもLCと言っていますし、LC外でもLCを知っている人は皆LCと言っています。米国議会図書館東京事務所の職員は東京事務所のことをLCTと言っています。

ところで、米国政府の海外の出先機関は、皆その国の米国大使館内の機関になるので、LCも東京の大使館の一つのオフィスとなっています。ところが東京の米国大使館では、LCという略語を使わないでLOCという略語を勝手に作って使っています。Library of CongressだからLOCと略したに違いありませんが、それはまた、Library of Congressの略語は世界中LCで通っているという単純な事実について無知であるからでしょう。

先月、日本図書館学会の総会が共立女子大学で開催されるということを聞いたので、友野先生にお電話したところ、先生がそばの方にLCの黒田先生よと言っているのが聞こえたので、私はすっかり嬉しくなりました。やっぱり図書館人は学があると。そして世界的に共通する合言葉を知っている仲間だと。今日は、東京都の仲間の皆様にごうしてお話できるのを大変嬉しく思いま

す。

Such an idea is alien to librarianship
およそ図書館人にはふさわしからぬ考え

私はLCに勤め始めてから今年で32年になります。その間、LCの職員の一人として、「成るほどこれがLCか」「さすがはLCだ」という風に感心したことが二度あります。その一つはこういうことです。新しい本がカタログされて入ってくると、リファレンスライブラリアンは大いパラパラとあけて見ます。中には、これこれ、あの雑誌に出ていた本で、入ってくるのを待っていた本だ。ちょっと見せてもらうかと自分の机に持って行ってしまうことがあります。中には参考書としてちょうどいいと言って、自分の後ろの参考書棚に入れてしまうこともあります。つまり新着書が、職員の事務用に独占されてしまって、閲覧者が利用できないということになります。当時の閲覧部長であった Willard Webb が *Information Bulletin* の中で、そういう習慣を指摘し、批判し、職員にはそのような特権が与えられているんだという考えは、およそ図書館人にはふさわしからぬ考えである (Such an idea is alien to librarianship) と痛烈に排撃したことを私は強い感銘をもって読んだことを、今に至るまで記憶しています。私が勤め始めてから4~5年経ったころのことだったでしょうか。

Webb部長は、アメリカ国民軍の大佐でした。国民軍というのは、最初志願した時には数週間程入隊して、基本訓練を受ける。その後は、週末兵士と言われるように週末だけ軍服を着て訓練に出かける。夏休みの時には、2週間位入隊訓練を受けるという制度です。国内の災害援助や治安出動などのためにかり出されるのは、ふつうこういう国民軍です。Webb大佐はLCを引退する前に少将に昇進しました。

図書館学校の出身ではありませんでしたが、私はこの人からユーザー優先というLCの基本的な姿勢を学びました。ついで乍ら、LCには執務用のための参考図書購入費がありますので職員は正当の手続きをとれば、必要とする本を求めることができるようになっていきます。

LCは独走しない...なぜなら、独走できるから

私はLCに感心した第二のことは、1950年代の半ば頃のことだったと思います。それまでLCでは中国・韓国・日本語の本のカタログはリファレンス局の東洋部にまかせていたので、私たちは日本課で、日本目録規則をつかって、日本語の本をカタログしていました。それをやめてLCが正式にLCの方式で極東語の文献のカタログをするための準備を始めたのが1955年頃でした。どういう準備をしたかということ Orientalia Processing Committee略してOPC(東洋資料整理委員会)に命じて中国・日本・韓国語の文献をカタログするに当たり、現行のLCの目録規則で十分かどうか。もし十分でないのであるならば、どこをどういう風に改訂増補したらいいのか。ローマ字はどれがいいのか。分かち書きはどうすべきかという

ことなどを検討させました。同時に、アメリカ図書館協会(A.L.A.)に通知して、A.L.A.がLCを除いた国内の日本語図書館の専門家を集めてA.L.A.の特別委員会をつくり、LCと呼応して、同じ問題を独自の立場から検討するよう要請しました。OPCは殆ど2週間に1回会議を開き、その議事録の写しをA.L.A.の特別委員会に送って批判意見を求めました。A.L.A.委員会の返事が来るとそれを検討して意見を添えて送り返すという手順を踏み、最後にはOPCとA.L.A.委員会とがLCで合同会議を開き最終的に意見を詰めるという手順を経て、ようやく1958年の初めからLCは正式に、中国語・日本語・韓国語の文献カタログをLC方式に従って行い、そのカードが印刷配布されることになったのです。LCはその為に2年以上の歳月を費やしましたが、ある時にはあまりの煩雑さにウンザリして、なぜLCはさっさと自分で必要な目録規則をかえるなり、足すなりして印刷カードを作らないのか。LCが決めたら他の図書館は自然にあとについて来るだろうと私はきいたことがあります。それに対して、こういう答えが返って来ました。LCは、非常に強力だから君の言うように独走しようと思えば独走することは簡単にできる。だからこそ、LCは独走すべきでないということを我々は肝に銘じている。今度のことでも、A.L.A.の協力を求めてLCとA.L.A.の共同事業としようとしているわけは、そうしなかったら、面白くないことが将来長く尾を引くということを我々はよく知っているからだ。この二つの私の体験から、皆様はLCのユーザーに対する態度、またLCの外の図書館に対する姿勢がどんなものであるかが、大体お分か

りになったことと思います。

100年前印刷カードの要請を馬耳東風と聞き流す

さて、LCの図書館協力活動ですが、LCが行った全国的な図書館協力活動のハシリは、1901年にはじめた印刷カード頒布でした。その当時アメリカには約5,000の公共図書館がありました。(Theodore Roosevelt大統領の1901年12月3日付の議会に対する年次教書。Cited in David C. Mearns : The Story Up to Now “これまでの話” in LC Annual Report 1946 p.188)。それに大学図書館を加えれば、相当な数の図書館が大体同じ本を買っては、それを、めいめいがそれぞれカタログを雇って、別々にカタログさせていたわけでした。こういうことは実に不経済であるばかりでなく、考えれば考えるほど、実に馬鹿げたことではあるまいか。それよりも国で最大の図書館であるLCがどうせ館内にカードを印刷するのであるから、余分を印刷して、我々に実費でわけてくれれば、全国で多くのカタログの俸給が浮き、それを本の購入費なり、他の用途に廻す方が、よっぽど賢明ではないだろうかという発想でありました。私は、この考えは至極簡単明瞭、且つまた甚だ合理的であって、そのような発想はアメリカだけでなく、どの国の図書館の歴史にあっても自然発生的な現象にちがいないと思いこんでいたのですが、この考えがLCに受け入れられるまでに何と、四半世紀以上かかったということを知って驚き入った次第です。

アメリカ図書館協会が創立されたのは、1876年で、LCはA.L.A.と共同で去年その創立百年の祝賀をLCでいたしました。1876

年のA.L.A.の創立大会でもLCに対して印刷カード頒布の要請の決議がなされました。そのような要望は、しかしその前からアメリカの図書館界にあったのです。ボストン Public Libraryは1853年から、またハーバード大学は1856年からカードカタログを採用し始めていたので、カタログカードの印刷頒布は国立の中央館の任務であるという意見はA.L.A.創立以前からしばしば発表されていたのであります。

今から100年前のことですから、すべてにおいて動きは緩慢であったに違いないでしょうが、それにしても、四半世紀も外部からの圧力を馬耳東風と聞き流して来た当時のLCの館長は一体どんなサムライであったのでしょうか。彼は六代目の館長 Ainsworth Rand Spoffordで1864年から1897年まで34年という長い期間館長を務めた人でした。この人は館長就任当時蔵書数わずか82,000冊の小図書館を、在任中に、372,000巻の図書、257,000冊の雑誌、290,000点の楽譜、74,000枚の写真、95,000点の版画、48,000点の地図等、合計1,136,000の資料を収蔵する大図書館に成長させ、それを収納するために現在のLibrary of Congress Buildingと呼ばれるLCの本館を建設させた人で、歴代の館長の中で、最初の大家館長として記憶されている人です。

Spoffordは米国の著作権法を改正させて、著作権局(Copyright Office)をLCの一部局にして、国内出版物が著作権を獲得する為には、LCの著作権局に登録し、登録費を払い、その上、2部ずつLCに納本しなければならないというLCにとっては収書面で甚だ都合な構想を考案し、その実施に成功した人です。

彼はまた、スミソニアン国立研究所 (Smithsonian Institution)が自分の出版物をもととして、細々と国際交換をしているのを見て、スミソニアンが米国政府の刊行物を利用して国際交換を大幅に拡大する法案を議会で通過させることに成功しました。こうして諸外国からの文献がなだれこんで来てスミソニアンが悲鳴を上げると、それを全部LCがお引き受けしましょうと現在のLCの国際交換事業の基礎を築いた人でした。

長い冬が去りとつぜん花が咲き出した

このように、収書面ではこの館長はなかなか功績が多かった人だったと私も思います。ところが図書館というところは、収書だけがその機能の全部ではありません。図書館には三つの原則的な機能があると私は思います。それは、収書、整理、サービスの三つで、収書された本が十分に整理されていないと、ユーザーにサービスすることができないばかりでなく、職員自身のリファレンスにも事欠くこととなります。蔵書数がふえればふえるほど整理が遅れないように十分注意して手を打たないと、折角集めた文献の情報検索が不可能になってしまいます。

Spoffordは、一口に言えばBook collectorであってlibrarianではなかったと言えます。彼は本を集めてその文倉の番をすることが図書館長の仕事だと考えていた人だったと言われても仕方がないと私は思います。文倉の本はどんなに豊富な情報を内蔵していても利用の道を絶たれているのですから死蔵物と同じことです。これに反して図書館に於いては、十分に整理された本

は大切な情報源としてダイナミックに利用されます。文倉は文化の墓場ですが、図書館は文化が爆発的に生産される場所であると私は思います。

さて新しいLCの建物が完成に近づくと議会はさすがにSpoffordには館長は無理と考えたのでしょう。1897年にSpoffordを解任して、John Russell Youngを新館初代の館長に任命しました。この館長が2年で死去したあとを受け1899年にHerbert Putnamが第8代の館長に任命されました。彼は図書館人になるまでは弁護士であった人です。1895年に33才で当時アメリカ最大の公共図書館であったボストンPublic Libraryの館長に迎えられました。ボストンPublic Libraryは当時のアメリカの図書館界では先進的な図書館で先程申しましたように、1853年には既にカード式カタログを採用し、LCが愚図々々しているの、しびれを切らして1879年以来、そのカードを印刷し始めた図書館でした。それで、LCもPutnamが館長になってから間もなく1901年に印刷カードに踏み切ったのは当然のことでありました。

この外、図書館の間の相互貸借、全国総合目録という国立の中央図書館として為すべき原則的な図書館協力活動が実施されたのもPutnam館長在任中のことでもあります。私は誰でも、当時のLCの歴史を辿る人は、この館長が来任したためにLCの長い冬が去り、突然花が咲き出したような感じがするに違いないと思います。さて、1901年に始めたこのプログラムは、翌年の終わりには212の図書館がカードを買い、その総額は\$3,785でした。これが、1968年には2,500の外国の図書館を含む25,000の図書館が7,900万枚のカードを買い、その総額は700万ドル

にのぼりました。7,900万枚のカードを縦に積み重ねると、15マイル即ち、24キロメートルの高さに達するという事です。ついでながら、1968年の数字をとったのは、この年に、^マ^ー^クMARCテープが頒布され始めたので、この年を境にして印刷カードの頒布は急激に減少します。1968年に7,900万枚だったのが1969年には6,300万枚と減り、現在入手できる最新の統計年である1976年には、3,900万枚とほとんど半分に減っています。

印刷カードの頒布とLCのリーダーシップ

LCはどうせ館内用にカードを印刷するのだからそれを余分に刷って頒布するという考えで始めたことですが、始めて見るとそんな一方交通的な考えで収まるような単純なことでないということが分かりました。LC自体としても、一度印刷カードに踏み切った以上館内だけで必要に応じてカタログ規則を自由に換えるというわけには行きません。印刷カードのカタログ事項の変更にはユーザーとの間の事前の合意が必要であるという新しい関係ができてきました。その時分はまだ、A.L.A.の目録規則が制定される前ですから、LCの印刷カードに表われているLCの目録及び分類規則が非公式ながら標準的なものと認められざるを得なくなったわけです。つまりアメリカの図書館界において、目録規則及び分類規則の統一化が実際問題として大きな課題となって来ました。そこで、LCとユーザー代表というとアメリカ図書館協会ということになりますが、LCとA.L.A.とが共同で1908年にCataloging Rulesを発表しました。編集者はLCの目録部長であったC.M.Hansonでした。こうして、LCは一步一步アメリカの国立の

中央図書館としてのリーダーシップを自然に発揮して行かなければならないようになってきたのです。そうなる、LCは色々なサービスをするようになりしました。例えばLCはDeweyの十進分類法がLCには不向きと分かってからは、LC自身の分類システムを作り出しましたが、中小図書館には、LCの分類法よりDeweyの方が便利であるのでその時以来LCでは特にDecimal Classification Division(十進分類部)がLCには必要としないDeweyの十進分類ナンバーをカードに入れる仕事をしています。現在では、部長を入れて約20人の職員がこの仕事に当たっていますがDewey分類法の改訂作業にも携わっています。現在では第19版が完了に近づき、今後の改訂事業の機械化の計画が開始されました。その他、LCでは必要としない児童書の簡単な内容紹介とか特別件名などを印刷カードにのせています。この10年来のことですが、本の定価がユーザーの便宜の為に印刷されています。目録規則は時折改訂を必要としますが、1908年に制定された目録規則の改訂が1941年に発表されたA.L.A. Cataloging Rulesで、LCの目録部のNella J. Martin女史が編集者でした。これの改訂版であるA.L.A. Cataloging Rules for Author and Title Entriesが1949年に出版されましたが、その編集者は記述目録部の主任司書であったClara Beetle女史でした。

同じ年にLCはLucile Morsch女史編集で、Rules for Descriptive Cataloging in the Library of Congressを出版しましたが、これは、A.L.A.が標準記述目録規則として採択しました。

1950年の半ばからLCはアメリカ図書館協会、イギリス図書館協会、カナダ図書館協会と共同で英米目録規則の制定に着手し、その結果、1967年にAnglo-American Cataloging Rulesが出版されました。この目録規則の編集者は、LCの記述目録部長であったSumner Spaldingでした。この目録規則の第2版は来年の半ばまでには出版されることになっています。その編集者は、LCの記述目録部の主任司書であったPaul Winklerであります。

スプトニックショックで図書費増大 LCカードに注文が殺到

このように、LCの書誌的管理工作は次第に国内外から国際的に成長発展して行きますが、その傾向は1960年代に至って特に顕著になります。そのわけは、1950年代の終わりからソ連のスプトニックで遅れをとったアメリカが、大学や研究機関に金をばらまいて追いつけ追いこせと研究開発に全力をあげました。その金の一部は図書費にまわされて、大学の図書館は外国の本を沢山買いました。それでLCにカード注文が殺到したのですが、LCはその半分も供給できなかったのです。ということは、LCの収書が大学図書館の半分位であったというわけでしょう。アメリカの議会は驚いて、1965年の高等教育法を改正してLCが世界の各国から調査価値のあると思われる新刊書を収集し、速やかにカタログして、その書誌的情報を印刷カード、若しくは他の方法によって頒布することをLCに義務づけました。そこでLCは1966年にNational Program for Acquisition and Cataloging (全国収書目録計画、^{エヌバック}NPACと略称)を実行に移しました。

シェアード・カタログिंगそして^{MARC}MARCへ

これは一口にいうと、世界で、新刊書のカタログカードを印刷している国においては、LCは、現地でそのカードに基づいて収書ならびに第一次の目録作業を行うということであります。LCは1968年に東京に事務所を設け、国立国会図書館のカードに基づいて本を注文し、また第一次カタログをします。標目とか、件名とかはLCの方式を使いますが、その他の基本的なカタログ情報は日本でいえば国立国会図書館(NDL)のカタログそのままを使用させて頂くというわけで、LCがNDLのカタログをShare(共有)するという意味合いからShared Catalogingと言っているわけであります。現在LCのShared Cataloging Centerは、ロンドン、パリ、ハーグ、ウィーン、ヴィースバーデン、オスロ、プラハ、ワルシャワ、ベルグラード、フィレンツェ、バルセロナ、東京にあります。その他ジャカルタ、ニューデリー、カラチ、カイロ、ナイロビ、リオデジャネイロに事務所を設け、その所在地の国の、また周辺の国々の出版物を収集カタログしています。

LCT(LC東京事務所)は毎週月曜日に平均250冊の本とそのカードを航空便でワシントンに発送しています。去年の10月1日から今年の9月末日までの会計年度内に送った本は約13,000冊で金額にすると約3,750万円です。こうして送られた本はワシントンで本カタログがなされたのち、カードの原稿が毎週1回東京に送られて来ます。それが東京の印刷屋で写植印刷され、カード6枚が1頁に印刷されたマットを2度校正した後、ワシントンに送り返します。そのマットからカードがLCで印刷されるわけであります。

このように世界各国の本をShared Catalogするに当たって痛切に感ずるのは、目録法の統一化の問題です。国際図書館協会連盟(International Federation of Library Associations-IFLA)が、現在国際標準書誌記述(ISBD)を通して目録法の国際的統一化を推進していますが、LCは極めて望ましいことであると強い関心と協力を示しています。

ところで、印刷カードはカードをストックするにも、カタログとして使用するにしても広い場所を必要とするだけでなくLCでは毎年閲覧者用のカタログに120万枚のカードをファイルしています。その他に公用カタログといって職員用のカタログがあり、その他5つのカタログがあって年間総数250万枚のカードをファイルしているわけであり、そのための人件費は莫大なものです。カタログが大きくなればなる程、益々非能率的となり、それを維持する費用は加速的に増大します。LCは、カードカタログの効用はやがてその限界に達すると結論し、1960年からカタログの機械化の開発を進めて来ました。その結果、MARC(Machine Readable Catalog - 機械可読カタログ)が、1969年3月から発足したので、LCは1980年をメドに現在のカードカタログを凍結し、それ以後はMARCを使用するという計画をたてています。私がワシントンを出発した時には、既に6台の端末機が閲覧者カタログの片隅におかれて実用に供されていました。勿論現在の所は1969年以後に出版された英・仏・独・伊・スペイン・ポルトガル・ベルギー・オランダ・デンマーク・ノルウェー・スウェーデン等の言語を使用している国の本に限られていますが、閲覧者は今まで、カードを見ては手写していた

カタログ情報が即座に文献リストとして紙の上にプリントアウトされて出て来る上に、無料で持ち帰れるのでなかなか好評です。

'77年新設された“ネットワーク開発室”
とこれからのLC

今後LCの図書館活動はどの方向に進んで行くでしょうか。私は書誌管理の機械化が日一日と推進されて行く現状から考えますと、LCは機械化された書誌管理の国内的また国際的なネットワーク間の協力活動に力をそそぐようになると思います。

現在アメリカには総計90,679の図書館があります。その内訳は、公共図書館が8,366 大学図書館が約3,000 連邦政府図書館が2,313 専門図書館が約12,000 学校図書館が約65,000となっています。(図書館情報科学国内委員会National Commission for Libraries and Information Science-NCLISの1975年発行の報告：図書館情報科学のための全国計画 Toward a National Program for Library and Information Sciences p.79)この中には、情報氾濫期に応じて新設された多くの情報センターも含まれていると思います。これらの図書館や情報センターは自然に同類を求めて地域別にまた専門別にいろいろなネットワークを結成するようになりました。これらのネットワークは全国に散在していて、ネットワークとネットワークとの間には今の所は、さしたる連絡は見られません。このようにバラバラに全国に散在しているネットワークを連結して一つの大きな全国的ネットワークを作ることがアメリカの図書館が現在直面している大きな課題であるのです。そこでLCでは、今年初め Network Development Office(ネットワーク

開発室)を新設し、昨年日本のNDLを訪れたHenriette Avram女史を室長に任命して、この課題の検討に当たらせてたのです。Avram女史は時を移さず18のネットワーク及びネットワークに関心を持つ団体の代表者をもって構成するNetwork Advisory Groupを組織しました。このグループは委員長にLCの副館長を、副委員長兼事務局長にAvram女史を指名しました。

Network Advisory Groupの中にはニュージーランド Library Information Network, Research Library Group, OCLCという略称で知られているオハイオ College Library Center、南カリフォルニアのWestern Interstate Library Coordinating Organization、ワシントン州のワシントンLibrary Network、アメリカの東南にあるSoutheastern Library Networkなどがメンバーになっています。このAdvisory Groupはナショナルネットワークを作る為には、どこにどういう差し障りがあるのか。それをどうすれば克服できるのか。その為にはどういう手順をふまねばならぬかというような問題を一つ一つ検討し、LC方式で全員が納得して協力するように推進して行くことを私は期待しています。LCでは既にこのAdvisory Groupの一員であるResearch Library Group(RLG)とLCとのタイアップを実験中であります。RLGはハーバード、イェール、コロンビア大学とニューヨーク・パブリック・ライブラリーの四大調査図書館を結ぶネットワークでニューヨーク・パブリック・ライブラリーのコンピューター・システムを使っています。ニューヨーク・パブリック・ライブラリーのコンピューター・システムはLCのコンピューター・システムとリンクしています。

それで例えばハーバードがNYPL(ニューヨーク・パブリック・ライブラリー)のコンピューターに話しかけて情報を求めます。その情報がNYPLのコンピューターにない時は、直ちにLCのコンピューターにスイッチしてLCのデータベースを探すことができる仕組みです。つまりLCと連結していれば、LCのデータベースを全部NYPLに備蓄するという重複を省くことができるという仕組みです。アメリカ全国でこのようにネットワークの連結が完成された時に、アメリカの国民が享受できる便宜と利益とを皆様は想像なさることができましょう。

アメリカでは今その方向に歩み出し、LCが例によってリーダーシップをとるように要請されているのであります。

LC MARCとJAPAN MARCそして グローバルなネットワーク

国際的にどういう風になったかと申しますと、現在のShared Catalogingはカードを使用していますが、各国の国立図書館のMARCテープが開発されるに連れてLCはカードをやめてテープに切りかえて行くでしょう。LCはすでにCanadian MARCをLC MARCと交換しています。NDLのJAPAN MARCは来年(1978年)稼動するということではありますが、LCの方はRoman alphabetの国語の入力で手一杯で日本語の方には現在何もしていませんが、LCの方の準備が出来次第JAPAN MARCが今までのNDLカードにとって代わることになると思います。こうして行く行くは各国のコンピューター・ネットワークがそれぞれリンクされて結局グローバルなネットワークを形成するということになるのではないのでしょうか。

私は今日はLCの印刷カードのことからLCの図書館協力活動を跡づけたのですが、LCの他の図書館協力活動である図書館相互貸借制度とか国内総合目録などについてはお話することができませんでした。またアメリカ全国のネットワーキングの構想のブレインであるNational Commission on Libraries and Information Science(図書館情報科学国内委員会)などについてもいつか機会があったらお話ししたいと思います。

アンドルー・くろだ氏

1910年 横須賀市に生まれる

明治学院を卒業し、1934年(昭和9年)渡米
戦争中は収容所の経験もあり。

1943年ミシガン大教授、米陸軍情報部員
に日本語を教える。

1946年4月LCの職員となる

1965年日本課長

1977年7月LCT所長

この原稿は、昨年11月12日、清澄庭園で行われたTLA講演会の記録をもとに、その後黒田氏が新たに調べられたことなどを加え書きおろされたものです。

T L A (東京都図書館協会) の 5 5 年

平成 1 8 年 1 1 月 3 0 日 発行 ©2006

編 集 : 今 まど子 (T L A 副会長)

発 行 : 東京都図書館協会
〒106-8575 東京都港区南麻布5-7-13
東京都立中央図書館内
03-3442-8451(代)

印 刷 : 東京都同胞援護会事業局
東京都千代田区外神田 1 - 1 - 5 昌平橋ビル